

# 鬼と河童の民話からみる土木技術者 についての歴史民俗研究

中尾 聡史<sup>1</sup>・森栗 茂一<sup>2</sup>・藤井 聡<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 京都大学大学院 工学研究科 (〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂 4)

E-mail: nakao@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

<sup>2</sup>非会員 神戸学院大学 人文学部人文学科 (〒651-2180 兵庫県神戸市西区伊川谷町有瀬 518)

E-mail: kurimori2007@maia.eonet.ne.jp

<sup>3</sup>正会員 京都大学大学院 工学研究科 (同上)

E-mail: fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

本研究では、歴史の陰に埋もれてきた土木技術者について、民俗学の視点から考察を行った。具体的には、まず、これまでの民俗学の知見を整理しながら、民俗学において、土木技術者がどのような位置づけにあるのかを論じた。そして、非農業文化の研究にいち早く取り組んだ若尾五雄の研究をもとに、河童の伝承には河原に住む土木技術者の姿が暗示されていること、鬼の伝説には土木工事にも関わった鉦山師の姿が暗示されていることを指摘した。また、鬼の石段にまつわる伝説から、土木技術者が鬼と呼ばれてきた可能性があることを指摘した。

**Key Words:** *folklore, civil engineer, oni, kappa*

## 1. はじめに

日本の津々浦々を生涯にわたって歩きまわり、庶民の生活に目を向けてきた民俗学者、宮本常一は、「生業の歴史」と題した著書の中で、次のようなエピソードを紹介している<sup>1)</sup>。

「土木建築の工事がなされても、讃えられるのはその工事を直接担当した大工や石工ではなく、その工事を計画し出資した人であった。私はかつて熊本県の石橋を調べて歩いたことがあった。熊本県の山間部には目を見晴らせるようなすばらしい石橋がいくつとなくある。それが深い溪谷の上にかかっている。それらの石橋をかけるために苦心して資金を集め、計画した人の名は今もよく伝えられまた人にも知られている。矢部町の通潤橋という見事な石橋をかけた布田保之助の名は県下に知れわたっている。しかしその直接橋の工事を行った石工たちの名を記憶している人は少ない。」

橋や堤防、ダム、道路などの土木構造物は、私たちの生活を支え、この国土を豊かなものにしてきた。しかし、土木事業を計画した人物や出資した人物が讃えられるこ

とがあっても、宮本の言うように、現場で汗を流した土木技術者については、記憶されてこなかった。また、市川<sup>2)</sup>が、「工事現場で実際の作業に従事した無名の人々の歴史についてはほとんど研究の目が向けられることはなかった」(p.1)と指摘するように、土木技術者の歴史についての研究も十分に進められてこなかった。

そこで、本研究では、歴史の陰に埋もれてきた土木技術者について、民俗学の視点から考察することとしたい。民俗学とは、主として、一般庶民の生活や文化の歴史を伝承や語り(物語)から考究する学問であり、本研究では、民俗学のこれまでの知見を整理し、河童や鬼の民話を調査することを通じて、土木技術者が、どのような人々であったのかを考察することとしたい。

## 2. 民俗学とは

ここではまず、民俗学について概説する。(1)では、土木学会における民俗学の動向を整理し、(2)では、民俗学がどのような学問であるのかを説明する。

### (1) 土木学会における民俗学の動向

近年、土木学会において、「民俗」の重要性が認知され始めている。2011年の土木学会誌では、東日本大震災において「てんでんこ（てんでんばらばらに逃げろ）」という三陸地方に伝承されてきた言い伝えによって、岩手県釜石市の住民の迅速な避難行動が成し遂げられたことが、当該地域の防災教育に尽力した片田敏孝によって紹介されている<sup>3)</sup>。「てんでんこ」という言葉は、明治29年(1896)の明治三陸地震や昭和8年(1933年)の昭和三陸地震の大津波を経験した世代よりもさらに上の世代から語り継がれてきたものであり<sup>4) 5)</sup>、まさに、津波による被害を経験してきた人々の知恵が込められた民俗知であると言える<sup>6)</sup>。

防災面だけでなく、合意形成やまちづくりなどの場面においても、民俗知を視野にいれていこうという主張が、特に土木計画学の分野で提出され始めている。例えば、森栗<sup>7)</sup>は、民俗学者である宮本常一の『忘れられた日本人』に記されている「対馬にて」の衆議の描写をもとに、日本の衆議の歴史変遷を見直し、その長所と短所を指摘しながら、現在におけるまちづくりの場での議論の在り方を模索している。また、藤井ら<sup>8)</sup>は、公共政策全般において物語が如何に援用可能であるかを説く中で、民俗学の実践的な性格に着目している。そして、地域に伝承されてきた民話などをもの語り、またそれに耳を傾ける行為が、地域内のコミュニケーションを促進させ、地域の活性化をもたらす得ることを指摘している。このように、我々の生活の中にある民俗を見つめ直し、土木計画を展開していく中で民俗を活用していくことが、重要視されつつある。

土木の歴史を調査する土木史研究の分野においては、土木史研究をより広く発展させる交流の場としてニューズレター「土木史フォーラム」が1995年に発刊されており、その創刊号の冒頭に、土木史研究と交流していくことが不可欠な学門の一つとして民俗学が挙げられている<sup>9)</sup>。しかし、これまでの土木史研究において、民俗学の文献を補足的に引用する研究は多少見られるものの、民俗事象を積極的に扱ったものは極めて少ないのが現状である。

### (2) 民俗学の概説

土木史の分野において民俗学を扱うには、そもそも民俗学がどのような性格を持つ学問なのかを理解することから始める必要がある。民俗学は、フォークロア(folklore)と呼ばれるが、フォークロアが誕生したのは19世紀中頃のイギリスにおいてである。産業革命が進行し、急速に伝統的なものが失われていく中、古い生活文化への関心が高まり、民俗研究が開始された。そして、日本においても、近代化の発展の中で、農村が疲弊し、長年

蓄積されてきた文化や伝統、また、それに対する誇りが急速に廃れつつあった昭和初期、柳田国男によって民俗学が提唱された。柳田は西欧のフォークロアを咀嚼し、日本独自の民俗学を完成させたのである<sup>10)</sup>。

柳田が民俗学の方法論について論じた数少ない著書の中の一つである『郷土生活の研究法』で、柳田は民俗学の目的を次のように記している<sup>11)</sup>。

「郷土研究の第一義は、手短かに言ふならば平民の過去を知ることである。社会現前の実生活に横はる疑問で、是まで色々試みて未だ積み得たりと思われぬものを、此方面の知識によつて、もしや或程度までは理解することが出来はしないかといふ、全く新らしい一つの試みである。平民の今までに通つてきた路を知るといふことは我々平民から言へば自ら知ることであり、即ち反省である。」(p.202)

我々の生活の中で生じる問題はことごとく過去に形成されたものであり、それゆえ、過去を知らなければ、現在を理解することはできない。柳田は、眼前の問題解決のために、現在と連続している「平民の過去」を知ることの重要性を説いた。「平民の過去」を知るとは、まさに「自ら知ること」であり、自己省察、すなわち自らの過去を振り返る「反省」が必要とされるのである。

宮田登<sup>12)</sup>もまた、「私たちの日常のごくあたり前と思われる行動やものの考え方を生活文化とか生活意識といったりするが、それを歴史的に再構成して、文化論的意味づけを考え、歴史的現在としてとらえようとするのが民俗学の一つの目的である」(p.218)と述べるように、民俗学とは、現在の我々の生活の中に息づいている歴史を導き出す学問であると言える。

## 3. 民俗学における土木技術者の位置づけ

本章では、民俗学における土木技術者の位置づけについて論じる。まず、(1)では民俗学の基礎概念とされる常民について説明した上で、(2)では民俗学において土木技術者がどのような位置づけにあるのかを明確にする。

### (1) 常民について

柳田は民俗の担い手として「常民」という概念を持ち出している。この「常民」とは、柳田による造語であり、学史上、さまざまな議論がなされているが、一応の共通理解として、実体概念と抽象概念があるとされている<sup>13)</sup>。ここでは、混乱を避けるため、実体としての「常民」について言及したい。

『郷土生活の研究法』において、「常民」とは次のよ

うな分類に従って説明される(pp.301-303)<sup>11)</sup>。村落の構成員は、定着農民である上層農民(おもだち)と普通の農民(自給自立農民)、そして、漂泊非農業民の3つに区分できる。上層農民にあたるのが、「いゝ階級に属する所謂名がある家で、その土地の草分けとか又は村のオモダチ(重立)と云はれる者、或はまたオホヤ(大家)・オヤカタ(親方)などゝ呼ばれてゐる階級」であり、江戸時代の半ばまで村の中心勢力をなしていた階級である。一方、漂泊非農業民にあたるのが、「普通の農民でなく、昔から諸職とか諸道などゝいつて、一括せられてゐた者」であり、具体的には「鍛冶屋、桶屋など、これらは何れも暫くづつ村に住んでは、また他に移って行く漂泊者」である。そして、この二つの階層の中間にあたるのが、村の住民の大部分を占めていた「極く普通の百姓」(普通の農民)であり、これが「常民」と呼ばれている。

すなわち、「常民」とは、日本人の大半を占めていたとされる水田稲作に従事する農業民のことであり、中世末から近世にかけて平地部に定着し、江戸時代には日本人の人口の約7割を占めていたとされる人々のことを指す<sup>12)</sup>。柳田は、日本の人口の大半を占めていたこの「常民」の持つ民俗体系に着目すれば、総体的な日本文化も捉えられると考え、1930年代頃から「常民」に焦点をあてるようになった<sup>13)</sup>。この「常民」に焦点をあてることで、日本人の家制度や祖先に対する観念の分析において柳田民俗学は、大きな成果を収めたのである。

さて、定着農業民である「常民」に対して、先述の分類の漂泊非農業民に当たる非農業民、特殊職業人のことを民俗学では「非常民」と呼ぶことがある<sup>14)</sup>。家財道具を背負い集団で山間水辺を漂泊し、箕づくりを生業としたサンカ(山窩)や、山中において轆轤をひいて器を作り、良材がなくなると他に移動して生計を立てた木地師などがこれにあたる。後年の柳田民俗学において、常民研究が主流となり、この非常民に対する研究が十分になされてこなかったことは、しばしば指摘されることである<sup>14)</sup><sup>15)</sup>。宮田<sup>14)</sup>は、「こういう初めから除外する部分があった上で常民が存在するのであり、こうした常民を主流とした日本民俗学は、当初から一つの限界をもってきているといえる」(p.244)と従来の民俗学を厳しく批判している。ただし、前期の柳田民俗学においては、『遠野物語』、『山の人生』に代表される「山人」研究や、『所謂特殊部落の種類』、『毛坊主考』などの「特殊部落」研究が行われており、決して非常民に関する研究が等閑視されていた、というわけでもない。

## (2) 非常民としての土木技術者

こうした非農業民を扱った前期の柳田民俗学の中でも、特殊部落研究において、土木技術者に関する若干の記述がみられる。柳田は、一貫して非常民に対して「漂泊者」

という分類の中で捉えているが<sup>15)</sup>、『毛坊主考』において、井戸掘りや池作りなどの特殊な土木技術を携えた人々を漂泊する非常民であることを示唆している(pp.363-365)<sup>16)</sup>。また、比較的早い段階において、こうした指摘を行ったものとしては、民俗学者でありながら日本銀行総裁を務めた渋沢敬三の「本邦工業史に関する一考察」が挙げられる。渋沢は、土木技術者をもった「黒鋳」や「河原者」などを、特殊な工業に関わっていた漂泊民として捉えている(pp.263-265)<sup>17)</sup>。このように、民俗学において、土木技術者は、定着農業民である常民の枠から外れた者であり、特殊職業人、漂泊民などの非常民として理解されているのである。

しかし、先述したように、1930年頃から柳田の関心は常民の研究に注がれるようになり、また、民俗学が柳田によって主導されてきたこともあり、民俗学において非常民に対する研究が十分になされてこなかったと言える。

1980年頃になり、ようやく中世賤民史や技術史の立場から土木技術者に関する比較的まとまった研究が、三浦<sup>18)</sup><sup>19)</sup><sup>20)</sup>によって提出されるようになる。三浦もまた、土木技術者は、交通の要衝を拠点として活躍した「坂の者」や「河原者」といった非農業的集団であることを推察している(pp.35-39)<sup>20)</sup>。三浦<sup>19)</sup>は、1936年に土木学会から提出された『明治以前日本土木史』の論調が「土木工事に専従する社会集団はまだ成立しておらず、土木工事は、農民による農業労働の延長としてとらえることができる」(p.124)という見解に基づいていることに疑問を呈し、中世における土木工事を専業とする社会集団の存在を指摘した。

ただし、市川<sup>21)</sup>は、こうした三浦の研究にも、史料的な問題から一定の限界があることを指摘している。史料的な限界がある中で、市川は、近世尾張で活躍した土木技術者である黒鋳が、中世の京都で活躍した下級の陰陽師(千秋万歳など多様な芸能を身につけた非常民)の系譜にあることを推察している。地鎮の呪術を持つ陰陽師が、その呪術的能力から土木工事に関係しており、結果として土木技術を持ち合わせていた可能性を示唆し、この土木技術が黒鋳へ継承されたことを、断片的な史料と伝承から見出している。そして、市川は、「日本の土木の歴史を考える時、呪術性と差別の問題は、かかすことのできない重要な要素として強く認識されるべきであろう」(p.12)と、土木技術者に関する歴史民俗研究に対して重要な視点を提示している。

市川の研究に先立って、近世における日本人の自然観と開発について説いたのが三鬼清一郎の研究<sup>21)</sup><sup>22)</sup>である。三鬼<sup>21)</sup>は、日本において古くから地鎮の祭儀が執り行われていた事実から、「土地には地の神が宿り、それを含めた自然界すべてに神々が宿る」(p.181)と考えられていたことを指摘し、日本において「自然景観に人為的

変更を加えることは、地の神の怒りにふれることと観念されていた」(pp.181-182)ということ推察している。そして、こうした観念があったがために、地鎮の呪術を持つ下級陰陽師が近世初期における開発に動員されていたと推察している。

一方、文化人類学の立場から民俗学に接近した小松和彦は、定住民である常民にとって、彼らの世界の外部に住み、様々な機会を通じて接触する非常民は、異人視される立場にあるとの見解に立った上で、異人である非農業民の存在が妖怪にまつわる民話を創り出す一つの大きな基盤になっていると指摘している<sup>23) 24) 25) 26)</sup>。

そこで、次章以降では、非農業文化の研究にいち早く取り組んだ若尾五雄の研究や中尾らの研究<sup>27) 28)</sup>を参考にして、土木にまつわる河童や鬼の民話から、土木技術者の姿を考察した。

### 3. 河童と土木

#### (1) 東京都浅草曹源寺の河童伝承

東京都浅草にある曹源寺に河童が築堤を手伝ったという次のような伝承が残されている(現地案内板)。

「今から 160 年ほど前の文化年間のころ、この一帯は、水はけの悪い土地でたびたび出水を起こしていた。そこで、合羽川太郎(本名:合羽屋喜八)は、私財を投じて排水工事に着手したが、工事はことのほか難航した。昔、川太郎にたすけられたことのある隅田川の河童たちは、これを見ていたく同情し工事を手伝ったおかげで、掘り割り(当時は新堀川と呼ばれた)は見事に完成した。」

このように河童などの妖怪が土木工事に関わるという伝承は浅草だけでなく全国各地に残されている。妖怪が築堤などの土木工事に関わるという話は、荒唐無稽の単なる作り話であろうか。

#### (2) 河童の実在

折口信夫は「河童の話」として、土木工事で働かされた人形が、工事が終わると放たれて、「があたり」すなわち河童になるという話を紹介している<sup>29)</sup>。土木工事の際に働かされた人形の成れの果てが河童であるという民話は、柳田によっても記録<sup>30)</sup>されており、全国各地で採集されている。このように、曹源寺の河童と同様の話が日本全国に残されているのである。

児童文学作家の松谷みよ子は、岸和田市の久米田池で、行基による堤防工事に土人形が手伝ったという伝承を採集し、土人形の子孫と呼ばれた人々が、堤防近くに住んでいることを発見している<sup>31)</sup>。また、若尾<sup>32)</sup>は、「ミズ

チが行基のつくった藁人形から発達し、天竜川の河原に住んでいる」という伝承をとらえ、河童とはまさに、「川小僧」と呼ばれる漁業や土木に関わった人々のことではないかと指摘している。歴史実証は難しいが、河原町の名のつく町は、土木技術者が住む、または土木技術者に関わる町であるらしい<sup>33)</sup>。

こうしたことを踏まえると、河童の民話は、土木技術者がかつて河原を中心にして活躍していたことを物語っていることが考えられる。実際、曹源寺の周辺はかつて沼地のような地域であり、黒鍬組の屋敷が存在することが、江戸時代の地図から確認できる。

## 4. 鬼と土木

### (1) 土木技術者と鉱山師

築堤と鉱山開発では、おなじ尾張鍬という名の鶴嘴形の工具が使われ、土木技術と鉱山技術には通底する部分が少なくない。土木と鉱山技術の関係について、宮本常一は次のように述べている<sup>34)</sup>。

「中国山地とか中部地方の山中には黒鍬師というのがあったんです。黒鍬師というのは鉄山とか銅山で働いていた人です。中部地方の西部、つまり美濃の国、越前の国、そのあたりは金がたくさん出ましたし、銅がでました。それを掘るために黒鍬師が出てきたわけです。その人たちが、やがて銅が出なくなったときに平野へ下ってきて、いろんな土木工事をやるようになります。濃尾平野にたくさん川が流れておる。そうして見事な堤防が残っている。自分らの村を守るために、輪中と言われる堤防が、多いときには二〇〇を超えるほどあったのですが、それを築いたのはじつは黒鍬師です。それがひとつの景観をつくり出していった。」(p.259)

このように宮本は、黒鍬師が鉱山師としても土木技術者としても活躍していたことを指摘している。他にも鉱山技術と土木の関連を指摘したものとして、川元翔一の五郎兵衛用水の研究<sup>35)</sup>などが挙げられる。

このように特殊な技術を持った非常民は、需要に応じて飛び回り、井戸や隧道を掘ったり、堤防を作ったり、さらには鉱山開発にも関わったのであろう。土木技術者は鉱山師でもあり、鉱山師は土木技術者でもあったことが考えられよう。さて、この鉱山師であるが、若尾五雄によると、彼らは鬼と呼ばれていたことが指摘されている。次節では、若尾の鬼伝説の研究について論じる。

### (2) 若尾の鬼研究

若尾の鬼研究は、若尾の妻の実家が、鬼伝説の残る佐

佐福神社（鳥取県日野郡日南町）であったことに端を発している。佐佐福神社には、孝霊天皇が日野郡にやってきて、人民を悩ませていた鬼を退治したという鬼退治の伝説が残っている。若尾は、なぜこの地域に鬼伝説が残っているのかを調べていく中で、この地域が一大砂鉄地帯であるという事実に着目する。また、この日野郡は、現在の広島県と岡山県の県境にあり、桃太郎の鬼退治で有名な吉備国に接している。桃太郎の鬼退治とは、宝物を盗んだ悪人の鬼を、桃太郎が退治して宝物を取り返しに行くという話であるが、若尾は、ここで、鬼は宝物を奪ったのではなく、鬼の住むところにこそ、金、銀、鉄、珠玉などが眠っているのではないかと考える。そして、若尾は、吉備津神社の宮司に話を聞き、やはり予想通り、吉備国が金工地帯であるという事実にとどりに着く。

若尾は、さらに、鬼退治伝説の一つである丹波国大江山の酒呑童子伝説にも着目し、現地に行って調査し、大江山が一大鉱山地帯であることを突き止めている。その他にも若尾は、鬼が語られる神社仏閣や鬼の名前がつく地名には鉱山が関係していることを例示し、鬼とは、金、銀、鉄を掘り起こす鉱山技術を持った鉱山師である可能性を指摘している。若尾は、中国・近畿地方だけでなく、全国的に踏査し、様々な根拠を示しながら、鬼と金工が深い関係にあることを論じている。こうした若尾の鬼研究は、単なる民話構造研究ではなく、歴史学的にも実証される鉱山技術者集団の実相に迫るものである。

若尾も述べているが、鬼退治伝説の残る地域すべてにおいて、鬼すなわち鉱山師を追い払うようなことがあったと必ずしも言えない。しかし、鉱山という異界に住む非常民を異人と捉え、時に畏怖する精神文化が日本において存在していたことを、こうした鬼伝説は暗示していることが考えられるのである。

さて、(1)において、宮本常一の論考や五郎兵衛用水の事例から土木技術者と鉱山師の近似性を指摘したが、非常民である鉱山師が鬼と呼ばれていたことを考えると、「土木技術者が鬼と呼ばれていた」という可能性が考えられる。そこで、次節では、鬼と土木の関連を示唆する伝説を取り上げることとする。

### (3) 鬼と石段

大分県豊後高田市の熊野神社に、石段にまつわる鬼伝説が存在する。その伝説の内容は、以下の通りである（現地案内板より）。

「この田染の里に毛むくじらの赤鬼がやってきて、人間を食べるといいます。それを聞いた熊野の権現さまは、何かよい方法はないかと考えました。そして、いち夜のうちに百の石段をこしらえたら許してやろうと約束したのです。権現さまは、とうていできるはずはないと

思っていたのですが、なんと赤鬼は、ひよひよいと石を担いで、あっという間に五十段こしらえました。その早いこと早いこと、みるみるうちに九十九段築いたのでした。おどろいた権現さまは、百段目の石を担いだ赤鬼の足が山かげに見えたとき、「コケッコウ」とにわたりの鳴き声をまねしたのでした。赤鬼は、「負けたあ」と最後の石を担いだまま逃げ出していったそうです。」

このように一種の土木工事である石段づくりを鬼が行ったという伝説が残されているのである。そして、この石段は架空のものではなく、熊野磨崖仏へと続く階段として現に存在し、今なお参拝客に利用されている。石段が存在しているのであるから、石段を作った土木技術者が実在していたはずである。そして、その土木技術者が伝説上、鬼と表現されているのである。

鬼が石段を築いたという同様の話は、九州地方に多く、福岡県豊前市国玉神社、大分県別府市八幡竈門神社、宮崎県都城市東霧島神社に存在している。九州以外では、秋田県男鹿市赤神神社や新潟県佐渡市金北山にも残されている。そして、いずれの地においても、鬼が作った石段が現存しているのである。

### (4) 石段の鬼伝説が残る地域の共通点

ここで、注目したいのが、大分県別府市八幡竈門神社を除いて、これらの地がいずれも修験道と関わりのあることである。若尾の鬼伝説の研究には、この修験道に関する考察も含まれている。それは、次のようなものである。

修験道とは、現代においては、経文を唱え、法螺貝を吹き、護摩を焚き、山々を回峰する行法であると考えられているが、本来は、錬金術といって水銀から黄金を採り、これを服用すれば永遠の生命が得られるとして、山中の金属を探し回った行法であると若尾は論じている<sup>34)</sup>。修験の根本道場である奈良県吉野山がなぜ、修験道場に適していたのかと言えば、吉野山は、水銀鉱床の上であり、修験者が水銀を採取するのに適しているからである。若尾は、吉野山の他にも、修験道の古い行場は金属が産出する場所であることを発見し、修験と鉱山の関連性、そして、修験者と鉱山師の関連性を指摘している。さらに、若尾は、吉野郡において、鬼の子孫だと言い伝えられている家がいくつか存在していることから、修験（鉱山）に関わる者が鬼と表現されてきた可能性を示唆している。

さて、鬼の作った石段の伝説の残る国東半島田染であるが、この地もまた六郷満山と呼ばれ、修験の地とされている。六郷満山の寺院では、旧正月に、修正鬼会と呼ばれる火祭りが行われ、鬼たちは、松明や斧を振りまわして踊り、やがて参拝人と輪をつくる。このように国東

半島の鬼も、この地においては、追い回されて、叩きのめされる鬼ではない。若尾によれば、国東半島の北部にある鬼籠と呼ばれる地には、鉾山との関連を示唆する鬼伝説が言い伝えられている<sup>36)</sup>。

鬼の石段伝説が残されている田染近辺では、このように修験道があり、鬼と呼ばれた人々が鉾物を採集していた可能性が考えられるのである。また、国東半島には、卓越した技術をもった石工が多く存在しており、石段づくりを行った技術者との関連性が窺える。鉾山では、鉾石を砕くために石臼が使われるが、石材の採取は鉾山の生産システム上、重要な要素であることから、石工もまた鉾山開発や土木事業に関わってきたことが考えられる。ただし、現存する史料だけでは、石段作りを行った土木技術者が、鉾山師なのか、修験者なのか、石工なのか、黒鍛なのか、それともそれらの複合なのかは、漠として分からない。

### (5) 鬼神堰

ここで、青森県弘前市鬼沢に着目したい。この鬼沢には鬼が築いたとされる堰が現存しており、内藤<sup>38)</sup>はこの堰について次のように記している。

「鬼沢村の由来も、むかし、岩木山赤倉の鬼が百姓の弥十郎という者を助けて、赤倉沢から流れるカレイ沢を水源にして、八キロ近くの人工的な堰をつくって水を逆流させ、その逆堰によって水田をつくることができた。そこで村人たちは村の名前も鬼沢と改め、鬼のクワとミノガサを御神体にして鬼神社をつくって祀ったというのである。」(p.154)

このように、鬼沢でもまた、堰作りという土木事業を行った人々が鬼と呼ばれている。なお、この堰は、鬼神堰と呼ばれ、今でも鬼沢の人々に利用されている。堰が存在しているのだから、堰を築いた土木技術者が実在していたはずである。

重要なのは、鬼沢のすぐ西にある岩木山には、他にも鬼伝説が残されており、数多くの製鉄遺跡も発見されていることである。このことから、鬼神堰を築いた鬼が、岩木山の製鉄に関わっていた人々であることが推察されるのである。その証拠に、鬼沢の鬼神社には、鋏などの鉄製の農工具が飾られている。また、岩木山は修験道の修行の場でもあった。つまり、鬼神堰を築いた鬼と呼ばれた人々は、鉾山師や修験者の可能性が極めて高い。非常民である鉾山師や修験者は、常民のために、鉄製の農工具をつくるだけでなく、堰作りという土木工事を行ったということであろう。この鬼沢の鬼伝説からも、山という異界を遍歴する鉾山師や修験者といった非常民が、高度な土木技術を持ち、伝説上、鬼と呼ばれてきたこと

が確認できるのである。

なお、鬼神社の伝承では、坂上田村麻呂が鬼退治によって、鬼沢に移ったといわれており、これはネブタ絵のモチーフになっている。興味深いことに、このネブタ絵の中央に鬼が描かれている。東北の縄文的な暮らしに押し寄せてきた大和朝廷の圧力、そのなかでの地域農業の開発、そのなかでの鬼とされた人々の歴史など、課題は多いが、これは、別途、伝承からその歴史を明らかにしていくことを考えている。

### (6) 鬼と橋

さらに、岩手県には、鬼が大工を手伝って橋架けを行ったという「大工と鬼六」と呼ばれる民話が残されている。大分県大分市の西寒田神社にも、鬼が橋を築いたという次のような伝説が残されている(現地案内板より)。

「その昔、霊山には恐ろしい鬼が住んでいました。鬼たちは麓におりてきては村人に悪さばかりしていました。ある時、天照大神を祀る巫女の親子が本宮山にやってくる。毎日お祭りをしていました。霊山に住む鬼たちにとって、祭りの音は嫌な音でした。鬼は親子を捕って喰おうとしましたが、母親が霊山から本宮山まで、意図版で橋を架けられたら食べられましようが無理難題の約束をさせました。ところが鬼たちは、一晩で橋を完成させかけたため、あわてた親子は手ミイを叩き、鶏の鳴きまねをしました。すると鬼たちは朝が来たと思い残念がって歯で石を噛み投げました。そして鬼たちは霊山からいなくなってしまいました。この歯形石は、その時の石とされています。」

この伝説には、天津神を嫌う鬼の姿が描かれているが、土木技術者と国津神との関連についても今後は考えていく必要がある。なお、これらの伝説に描かれている橋について調査を行ったが、石段と異なり橋は現存していないと考えられる。

他にも、修験道の開祖である役行者が鬼神を使って、橋を架けさせたという伝説が大峰山に残されている<sup>39)</sup>。役行者だけでなく、行基や空海といった宗教者が土木事業を行った背景には、鉾山や修験、すなわち鬼との関連が想起されるが、これについては別途、考究していく必要がある。加えて、空海が杖をたたくと水が湧いたという伝説が日本各地に残されているが、当時の宗教者が土木事業に関わった背景には、鉾脈だけでなく水脈を見つける技術を持ち合わせていたことが考えられる。

## 6. おわりに

本研究では、民俗学のこれまでの知見を整理し、鬼の伝説を調査することを通じて、妖怪が築堤などの土木工事に関わったという伝説の背後にある土木技術者の姿について論述した。

まず、民俗学での議論を整理しながら、土木技術者が、定住農業民（常民）ではなく、非常民として位置づけられることを指摘した。そして、河童の伝承には、河原に住む土木技術者の姿が暗示されていることを指摘した。また、鬼の伝説には、土木工事にもかかわった鉦山師の姿が描かれていることを指摘した。

史料的な限界がある中で、非農業世界に生きた土木技術者の姿を追うには、本研究が示したように、若尾五雄のもつ民俗研究<sup>32) 36) 37)</sup>の視点が大きい役立つであろうと考えられる。本研究では、若尾の妖怪研究に着目することで土木技術者の歴史に迫ったが、若尾の研究対象は、鬼や河童といった妖怪だけではなく、松浦佐用姫の人柱伝説や土木工法などの非農業世界に及んでいる。こうした若尾五雄の遺した民俗研究のスキームを利用することで、これまで解釈が困難であった土木にまつわる民話や伝説を読み解くことが可能になっていくと考えられる。

**謝辞：**本研究を遂行するにあたり、大分県障害者社会参加推進センターの高窪修氏に多大なご協力を承りました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

## REFERENCES

- 1) 宮本常一：生業の歴史，未来社，1993.
- 2) 市川秀之：オワリ衆の伝承を追って—近世の池構築造技術者集団—，近畿民俗，Vol.125，pp.1-15，1991.
- 3) 片田敏孝：記事5 インタビュー 釜石市における津波防災教育—市内小中学校の子どもたちを救う—，土木学会誌，Vol.96，No.8，pp.23-28，2011.
- 4) 山下文男：津波の恐怖—三陸津波伝承録，東北大学出版会，2005.
- 5) 山下文男：津波てんでんこ—近代日本の津波史，新日本出版社，2008.
- 6) 矢守克也：「津波てんでんこ」の4つの意味，日本災害科学，Vol.31，No.1，pp.35-46，2012.
- 7) 森栗茂一・板倉信一郎：忘れられた衆議～日本の合意形成のこれまでとこれから～，土木計画学研究講演集，Vol.51，No.350，2015.
- 8) 藤井聡・長谷川大貴・中野剛志・羽鳥剛史：「物語」に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義，土木学会論文集 F5，Vol.6，No.1，pp.32-45，2011.
- 9) 武部健一：「土木史フォーラム」の発刊に寄せて，土木学会土木史研究委員会ニューズレター，創刊号，p.1，1995.
- 10) 福田アジオ：「民俗学の目的」，福田アジオ・小松和彦編『講座日本の民俗学 民俗学の方法』，雄山閣出版，1998.
- 11) 柳田国男：柳田国男集 8，筑摩書房，1998
- 12) 宮田登：新版 日本の民俗学，講談社学術文庫，1985.
- 13) 宮田登：民俗学研究法，福田アジオ・宮田登編日本民俗学概論，吉川弘文館，1983.
- 14) 宮田登：民俗宗教論の課題，未来社，1977.
- 15) 門馬幸夫：柳田国男と被差別部落の問題，差別と穢れの宗教研究，岩田書店，1998.
- 16) 柳田国男：毛坊主考，近代日本思想体系 14 柳田国男集，筑摩書房，1975.
- 17) 渋沢敬三：本邦工業史に関する一考察，渋沢敬三著作集（第一巻）祭魚洞雑録，平凡社，1992.
- 18) 三浦圭一：中世民衆生活史の研究，思文閣史学叢書，1981.
- 19) 三浦圭一：中世の土木と職人集団，永原慶二・山口啓二編，講座 日本技術の社会史 土木，日本評論社，1984.
- 20) 三浦圭一：日本中世賤民史の研究，部落問題研究書，1990.
- 21) 三鬼清一郎：近世初期における普請について，名古屋大学文学部研究論文集，Vo.89，pp.173-185，1984.
- 22) 三鬼清一郎：普請と作事—大地と人間—，朝倉直弘他編，日本の社会史 第8巻 生活感覚と社会，思文閣出版，1987.
- 23) 小松和彦：魔と妖怪，宮田登他編『日本民俗文化体系 第4巻 神と仏』，小学館，1983.
- 24) 小松和彦：新しい妖怪論のために，創造の世界，Vol.53，pp.6-25，1985.
- 25) 小松和彦：鬼の玉手箱 民俗社会との交感，青玄社，1986.
- 26) 小松和彦：異人論 民俗社会の心性，筑摩書房，1995.
- 27) 中尾聡史・森栗茂一・藤井聡：河童の民話における土木技術者の位置づけに関する民俗学的研究．実践政策学，Vol.2，No.1，pp.45-52，2016.
- 28) 中尾聡史・森栗茂一・藤井聡：鬼伝説からみる土木技術者の位置づけに関する民俗学的研究．実践政策学，Vol.3，No.2，pp.173-180，2017.
- 29) 折口信夫：河童の話，折口信夫全集 第三巻，中央公論社，1966.
- 30) 柳田国男：桃太郎の誕生，定本 柳田国男集 第八巻，筑摩書房，1969.
- 31) 松谷みよ子：民話の世界，講談社，2014.
- 32) 若尾五雄：『河童の荒魂 河童は渦巻である』，塙屋凶書，1989.
- 33) 森栗茂一：河原町の歴史と都市民俗学，明石書店，2003.
- 34) 宮本常一：「民衆と文化」『宮本常一講演選集 2 日本人の知恵再考』，一般社団法人農山漁村文化協会，2013
- 35) 川元祥一：『被差別部落の生活と文化史』，三一書房，1991.
- 36) 若尾五雄：『鬼伝説の研究—金工史の視点から』，大和書房，1981.
- 37) 若尾五雄：『金属・鬼・人柱その他—物質と技術のフォークローア—』，星雲社，1985.
- 38) 内藤正敏：『ミイラ信仰の研究』，大和書房，1985.
- 39) 河原宏：空海 民衆と共に—信仰と労働・技術，人文書院，2004.

HISTORICAL FOLKLORE STUDY ON CIVIL ENGINEERS FROM STORIES OF ONI  
AND KAPPA

Satoshi NAKAO, Shigekazu MORIKURI and Satoshi FUJII